

A中学校B主任の思い「子どもによりそって」の意味
を探る：担任によりそう主任の学年経営

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 崇 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007244

A 中学校 B 主任の思い「子どもによりそって」の意味を探る

－担任によりそ主任の学年経営－

森 崇

1. はじめに

教職大学院に入学するまでの14年間、筆者は教員として、多くの生徒、教員と出会ってきた。その出会いの中で、多くのことを学び、自分なりに考え、学級担任・部活動顧問・特別活動主任・生徒会担当などの役割を通して実践してきた。筆者は、学校・職員・学級・部活動などを1つの集団と捉え、集団をどのようにすべきかを考えていた。ただし、特に学級では、集団＝個の集まりと考え、一人ひとりと接することを考えてきたつもりであった。ただし、大学院で様々なことを学んだり、自分の教員生活を振り返ったりする中で、筆者の個への対応というのは、ただ、同じことを一人ひとりにしているだけであったと気づいた。

また、これまでの経験で、学年主任の経営のしかたで、学年という集団が大きく変わることを実感していた。学年主任が、どのように学年という集団をリードしているかを理解したいと考えていた。滞在校実習はA中学校で行うことになった。2年生が落ち着かないということで、この学年部に入ることになった。初めてB学年主任にお会いした時に、人間的な大きさ、温かさを感じ魅力的な人だと感じた。

2 研究の目的

(1) 事前説明とは違う子どもの実態

事前説明では、2年生が良くないということであった。ただし、実際に筆者が子どもと接した感想は、「2年生は悪くはない」というものであった。確かに気になる生徒はいたが、話してみると柔らかい表情で話をした。服装がだらしない生徒もいたが、注意をすると反抗することがなかった。

(2) 研究の目的

筆者がB学年主任に、なぜ魅力を感じたかを知りたいと思ったのが最初の動機である。初めてお会いした時に、B主任が話した「担任は子どもによりそってほしい。」という言葉が印象に残っていた。よく聞く言葉で、響きの良い言葉だが、意味としてはぼんやりとしかわからない言葉であった。ただ、実際に校内での子どもたちの表情を見たり、学年部の教員の明るさに触れたりする中で、「よりそう」とは具体的にどのようなことなのかを理解したいと考えた。また、「担任が子どもによりそう」ために学年主任が、何をしているかを知りたいと考えた。

3 研究方法

(1) 協力者

静岡市立 A 中学校

生徒数 1 年生 172 人 2 年生 190 人 3 年生 182 人 全校生徒 544 人 職員数 41 人

(2) 対象者

平成 21 年度 2 年部教員、平成 22 年度 3 年部教員（継続）

主な研究内容は、平成 22 年度のものである。ここに平成 22 年度の 3 年部の教員構成を表 1 にまとめる。

表 1 平成 22 年度 3 年部の教員

B 主任 男	学年主任		1 年より持ち上がり	50 代	保健体育科
C 教員 女	担任	副主任	2 年生からの持ち上がり	40 代	英語科
D 教員 男	担任	特活主任	今年度より 3 年部	40 代	理科
E 教員 男	担任	生徒会	1 年より持ち上がり	30 代	数学科
F 教員 男	担任	生徒会	1 年より持ち上がり	40 代	理科
G 教員 女	担任	学習	1 年より持ち上がり	30 代	国語科
H 教員 男	担任	生活	1 年より持ち上がり	40 代	社会科
I 教員 女	級外	進路	1 年より持ち上がり	50 代	美術科
J 教員 男	級外	生徒指導主事	今年度より 3 年部	30 代	社会科

(3) 実施期間

平成 21 年 10 月～平成 23 年 1 月 平成 21 年度、約 20 回 平成 22 年度、約 40 回

(4) 手続き

- ① B 主任、担任等、校長からの聞き取り
- ② 3 年部参与観察

4 B 主任からの聞き取り

B 主任の基本的な思いは以下の通りである。

「3 年間を見通して、義務教育の出口を考えて学年経営している。」

「なにより子どもの一番近くにいたのは担任であるべき。」

「担任のプライドのようなものを傷つけない。あまりでしゃばりたくない。」

「担任は子どもによりそってほしい。」

「担任はとにかく子どもとしゃべってほしい。」

21 年度末 3 月 「担任は子どもとしゃべれるようになった。」

22 年度 6 月 「よりそう」とはどういうことか、という質問に対し「子どもが、一般的な判断からだめなものはだめと言われたとき、担任は子どもの立場に立って、子どもに考えさせること。」

22 年度 10 月 子どもが落ち着いてきたと感じたので、評判が良くなかった 2 年生のとき、「子どもによりそう」というやり方に自信があったかという質問に対して「自信があったわけではな

いが、間違っただけはしていないはずだ。」

さらに、なぜ「子どもによりそう」ことが大切と感じたかという質問に対して「平成4年に1年生の担任をしたとき、規律を守らせるために怒ってばかりいたら、その後学校で生き生きとした様子が見られなくなったとき、怒っているだけではだめだと感じた。」

子ども観「子どもは植物のような存在で、世話をしなければ育たない。ただし、どんな花が咲くかはわからない。」22年度12月「どんな花が咲いているか見えますか」という質問に対して「まだまだ見えません。」

5 「よりそう」ということ

(1) 平等のステージにのせる

C教員（学年副主任）と女子生徒K

C教員はKの担任を2年生からしている。Kは両親がおらず、祖父と兄2人と生活をしている。Kは2年生の冬から、不登校となっていた。3年生からは、登校するようになったが、髪の毛の色の指導を何度か繰り返した。その度に美容院が開くのを待って、染め直して登校した。C教員はそうすることによって、「私と話ができると思っているように見える。」と言っていた。4月には、Kが上履きを外に置きっぱなしにして、濡らしてしまった。汚れていて、いたずら書きもたくさんあったので、C教員はそれを捨てて、新しい物を購入した。Kに「汚かったから捨てたから、これ履きな。」と言って渡した。Kは「余計なことしないでよ。」と言いながら、喜んで履いて大切にしている。5月には色つきの下着を着て登校する女子生徒の問題が上がった。C教員は祖父が女子の下着を買うのは無理と考え、3枚の下着を買って渡した。その後色つきの下着で登校することはなかった。7月はKの誕生日があった。Kは「どうせ誰も祝ってくれない。」とつぶやいた。C教員は「いい子にしていたら、プレゼントする。」と言った。C教員は、「Kは母親がいないため、女性にかわいがられたいという気持ちが強かったと思う。」と話していた。そして、Kがこの頃リストカットをしていたことを知っていたので、「自分を大切に」というメッセージカードを添えてプレゼントを渡したという。その後、9月の体育祭や11月の合唱祭の練習では、級友をリードする場面もあった。12月以降は、Kの心の中を自分からC教員に話すようになった。

(2) 「先生のクラスで良かった。」

D教員（担任）と女子生徒L

D教員の学級にわがままな生徒Lがいる。4月、5月は、Lは「D（呼び捨て）キモいから近寄るな。」など暴言を吐いていた。それでも、D教員は根気よく声をかけていた。Lは学校を飛び出すこともあったが、D教員は保護者との連絡は怠らなかった。しかし、6月になるとD教員はLとの距離を置くようになった。「友達とつなぐことを考えるようになった。また、学級の中で浮いていない状態を級友に見せたかった。」と話している。7月の中体連には、小学校から続けている新体操で参加させたいと考えた。「やってできたという経験をさせたかった。」と話している。本人、保護者、B主任、D教員がそれぞれ話をし、中体連に参加した。結果は市の予選を通過し

県大会出場を果たした。9月からは、D教員と明るく話すようになった。しかし、12月には、授業中の態度を注意され、職員室のD教員の所に話に来ている。D教員はLの話をしっかりと聞いている姿が印象的であった。Lが言葉に詰まっても、何も言わずに言葉が出てくるのを待っていた。このときの様子をB主任に話すと、「Lがね、母親に「D先生で良かった。」って言ったんだって。」と話してくれた。現在Lは普通に教室で生活している。ただし、全く問題行動がなくなったわけではない。D教員を呼び捨てにするのは相変わらずである。

(3) 「よりそう」とは

(1)の事例では、その子にないものを埋めているという印象が強い。学校は平等なところと言われる。しかし、考えてみると、生徒一人ひとりの家庭環境や生い立ちなどは様々である。もともと平等な状態で学校に存在しているわけではない。皆を平等にするために、一人ひとりに違うかかわりをもつことを図1に表す。

斜線の部分を埋めるかかわりが必要であることがわかる。

どちらの事例も、子どもの話を聞き、メッセージを聴き、その子が多面的に考えられるように訊き、保護者等と連携をとりながら待つという、まさに「よりそう」という場面がある。この様に子どもとかかわることによって、最初は悪循環だったものが、良循環になる。その良循環の状態が信頼関係と言える。

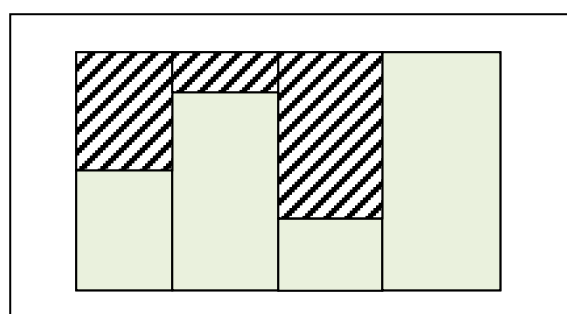


図1 その子にないものを埋める

6 3年部担任からの聞き取りからわかること

(1) 共通点

共通点は、子どもとの出会いの印象が良くないこと。担任は主任を信頼していること。担任がやりたいことを主任が認めてくれること。(ゴールは決まっているが、通り道はたくさんあって、その道幅が広い。)担任が困ったとき、主任がさりげなくフォローしてくれること。(担任の見えないところで、子どもとのコミュニケーションをとり、担任が必要な情報を渡す。)

信頼関係があるのは、良循環が起きているということである。さらに、主任が担任の話を聞き、メッセージを聴く、主任が担任の判断を認めること、主任は、結果を待つ中で、担任にさりげなくフォローしている。つまり、主任は担任によりそっていると言える。

(2) 新たな疑問

これまでのことを考えると、担任と子ども、主任と担任、のつながりが見えてきた。ただし、担任同士のつながりが見えてこない。それぞれの担任は、自分の方針で学級経営を進めている。それなのに、教員同士が子どものことで、話がもり上がる理由を考える。

7 一枚岩の学年部

(1) 学年経営案から見えること

生活指導 清掃	「時間いっぱい活動する。やっていないところを探して活動する」
特別活動	「校歌を大きな声で歌う」
進路決定	「進路決定に向かって全力で取り組む」

これは、一部だが、上記のように子どもが主語になった文が多い。教員が何をするという方法論ではなくて、子どもがどうなるかを考えている。

(2) 3年部と校長の話し合い

5月の衣替えの準備期間に3人の女子生徒の下着の色が生徒指導上の問題としてあがる。校長が校長室で3年部の意向を聞く機会を設けた。3人の女子生徒の担任と、学年主任の言葉を下に記す。

C教員・・・	「 <u>去年まで来ていなかった子が、がんばって来ていることを認めて欲しい。</u> 洗濯が間に合わないときもある。以下略」
D教員・・・	「 <u>よくないことを認めるつもりはない。</u> ただ、あの子のことを考えればダブルスタンダードを認めて欲しい。 <u>そうすることでやっとバランスが取れている。</u> 」
G教員・・・	「 <u>あの子との関係をやっとここまで作ってきた。</u> 家庭の協力を得るのも難しい。 <u>一度来なくなったら、二度と来なくなると思う。</u> 」
B主任・・・	「 <u>ここまで積み上げてきたものを認めて欲しい。</u> <u>ここまで欠席が少ないことがあったか。</u> 以下略」

発言内容の善悪については、ここでは置いておく。注目すべき点は、子どもを主語に語っているということである。

(3) 学年部のつながり

(1)(2)よりこの学年の中心には、子どもがいることがはっきりとわかる。子どもを軸にして物事を考えているということである。指導の方法等の具体的なレベルではなく、「子どもを学校に来させる」というレベルでの一枚岩といえる。5(1)(2)の事例のようなかかわりを認めることができるわけである。

問題行動などを、単に子どもの特性とは考えていない。子どもそのものを変えようとはせず、生徒の文脈を変えることで、子どもが変わるのを待つという姿勢と取れる。つまり関係論として考えることができる。子どもと主任と担任の関係を図2に表す。

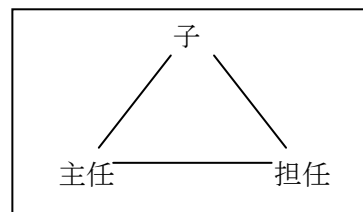


図2 3年部の関係図

8 学年部と学校をつなぐ

主任は、学年部と学校をつなぐ努力もしている。ただし、そこでも無理に子どもそのものを変えようとはしていない。子どもと担任とのかかわりをオープンにすることで、校長の、この関係

への見方を変えている。そして、最終的に校長の子どもの見方が変わるという関係である。この関係を図3に表す。

具体的な例としては、登校指導があげられる。修学旅行前に、3年生の服装のだらしなさを校長に指摘された。そこで、主任は、担任に登校指導をお願いしている。3年部は校長の目の前で毎朝生徒と会うことになる。ここで、校長は担任と子どものかかわりを見ることになった。

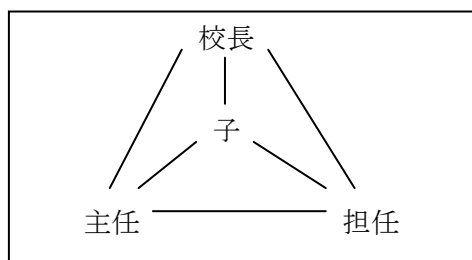


図3 校長と3年部の関係図

また、修学旅行では、生徒の問題行動の指導を校長も一緒に行った。校長は、この様に担任と子どものかかわりを目にした。その後校長は、「生徒の実態を把握し、3年部のやろうとしていることを理解した。」と話している。校長は3年部によりそっているといえる。

9 おわりに

筆者は教職大学院に入学する前、学年主任と生徒とのつながりが見えなかった。筆者がこれまで描いていた学年部の関係図を図4に表す。

つまり、主任の指示で担任が、子どもを引っ張っていくというイメージであった。しかし、この学年部のつながりは、筆者のイメージとは大きく異なっていた。担任が

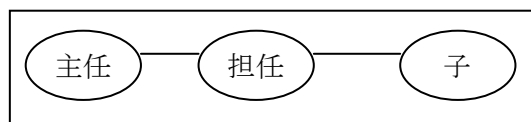


図4 入学前の学年部のイメージ

子どもによりそい、学年主任が担任によりそっているという経営方針に今は驚いている。さらに、学年部内をつないでいるだけでなく、学校と学年部をもつないでいる。入学前に、筆者は学年主任によって、学年という集団が大きく変わると感じていたが、これだけのことを考え、実行しなければならないのだから当然であると考えようになった。

ただし、筆者が一番考えさせられたのは、子どもを軸に考えるということである。筆者は、子どものことを考えて教育活動を行ってきたつもりである。ただし、筆者は子どもを良くするための方法論を考えていただけのように感じている。B学年主任に初めてお会いしたときに、筆者はこの方法論のようなものを聞きだそうと思っていたのかもしれないと感じている。ただし、B主任は最初から、子どもを軸に話をしていたのだろうと考えている。筆者はその話の内容に引き込まれ、B主任に魅力を感じたのだと確信している。

しかし、この実習で学んだことを現場で生かすことが最大の目的である。学校という組織の中では、常に「子どもによりそう」ということができないことも考えられる。ただし、子どもと保護者と筆者という関係の中では、「よりそう」という関係を意識することができると考えている。

「保護者が子どもによりそい、筆者が保護者によりそえる関係」を作ることが、今の筆者が考える実習での学びを生かす方法である。さらに、これまでのアクションリサーチから新たな疑問が二つ生まれている。一つ目は主任を支えるべき、教頭、校長のマネジメントである。二つ目は「子どもを軸に語ると、本人はその子の今を見ているのに、周りから見ると未来を見ているように見える。」という大学教授の言葉の意味を探ることである。